北野教句集雜

類題発句集雑部

蝶夢編

恋

忍恋

夏痩とこたへてのちぞ泪かな　季吟

筆の鞘嚙て待夜の姿かな　尼 芳樹

逢不遇恋

逢さりし後く痩ぬ夜かれ　兎貢

衣々や我影見えて戻りけり　冬松

おもひあれは麝に落る風巾　我黒

[illegible]　　枝風
[illegible]　　文淵
[illegible]　　長虹

逢恨恋

我恋やいとゝ吸まぬ煙草盆　　嵐雪
[illegible]　　、

待恋

[illegible]　　言水

寄梅恋

[illegible]　　耽坡

[illegible]　　、　　太祇
[illegible]　　、
[illegible]　　小春

[illegible]
[illegible]　　曲翠
[illegible]　　その
[illegible]　　和及
[illegible]　　冰花

ほし合や風の吹入る絵の壺　冰花

あつき夜我家ハ出ましと覚へけり　鶴立

男なき寝覚ハおそハ物憂かり　拾女 花咲

後朝の文より

おもハすも身ハ錦木の塵となれ　信中女 織女

はし足も月に問ハさ恥しや　山川

小夜嵐に念者を唐の臣焼かり　李由

扇折る手にたくりし化粧かれ　尚白

さむしろや衣〳〵ぬ人を待かねて　登中妻

物おもひ火焼をゆるくいねかん　弄泉

待恋

妻隠我夜参もし見下さん　荷兮

閑居増恋

秋ひとり吟杖を川まて携女郎　、

恨ミ寒に蘭畫引る火焼かり　鷺夷

知妻やうし物に物ひとりもちま哉　壺平

待らしや纜の糸子我たてくにも　鶯水

欲言出恋

簑笠も我も君ひとりまてぬ時　、

夜やら火や打し恋ろ君が許　枚候

[illegible]の鐘[illegible]
雪くの[illegible]

若葉　文那

別墓

[illegible]月送[illegible]

旦藁

恐惶

[illegible]花やかなる友[illegible]

浮柿　姪女

[illegible]

送別

[illegible]の東武[illegible]送る

[illegible]菜はうこの[illegible]の[illegible]汁　芭蕉

風瀑を[illegible]

[illegible]小夜の中山[illegible]

[illegible]何う[illegible]馬の[illegible]

[illegible]義の中[illegible]

[illegible]民[illegible]

[illegible]

支考京より帰る

代々の捨て子を拾ひ育てし麦の種蒔きつるにつまされる　芭蕉

孤屋旅立ち数年ぶりにて西川アラく天道ありく　、

雲かなたこの頃まそりも新市　耿坡

月の物見つるを馬喪上　耿水

抱いそたきへ秋の出つ帰り　舟象

友達の公象を刺刀ひくくを海ゆ出ずり

新住の誓ひ入道数月夜　象袋

陸奥子の湯田遠くしく

好為ゆき人者を有へ大農業　白笑

義のたけ帰る我遠

木カラ孤ひ孤ひ孤ひ孤ひ　風雪

桃園妻敬に訪我遠

虚空我引くを先生や風巾　、

泊うもや乾かの蝿のまれを塗　岱水

別僧

ちゝ時者公やはさけの花　戟人

義の忍者くをおれ　、

青蓮院殿古やへ帰やとりた
ゑをとりつゝ中よ蔦ゝ撞月　太素
立ぬ月高しやとて紙八扇うれ　霜船
蔦つまの古れぬるやいつ物ゝ　文考

乙おゝ
月さへさへつゝ人ゝ旅や高士の雲　船月
なれゝ社よすゝ新秋蔦塚　一井
屋形船おるゝと何面白　支考
白川ゝひゝもゝふれ秋の風　〃
白男ゝし〻ゝ海ゝ雲ゝ月ゝ　嵐雪

大君ゝの氷路ゝ新名所ゝ　杜國
拾吟ゝ月ゝ月ゝ月ゝ今ゝ
燕ゝ徒ゝ古ゝ第ゝ
送ゝ山ゝ月ゝ　正秀
山川ゝ公ゝ　利合
蓮二法師武蔵　北枝
青蓮院殿ゝ解ゝ海ゝ何ゝ　乙由

留別

[illegible]や[illegible]亭主の自亭洞　芭蕉

送られつ送りつゝて八木豆の縄　〃

小提灯[illegible]の人送りつゝ此夜[illegible]

[illegible]にあよ[illegible]て

指出つゝ扇引さゝく[illegible]乳　〃

孤屋[illegible]尾[illegible]芳野へ旅立[illegible]

此角[illegible]哉忘れ[illegible]ふ[illegible]乳[illegible]

舎那送り[illegible]

短夜の[illegible]や新十[illegible]架　支考

[illegible]に[illegible]文[illegible]　〃

[illegible]円[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]

[illegible]だ[illegible]萩の京　蔦良

[illegible]花[illegible]大根引　涼菟

京[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]て[illegible]萩[illegible]　素丸

[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]尾[illegible]立[illegible]

[illegible]尾[illegible]菊の[illegible]　路通

京我出家人に日の国よりく
物のたまくく 浪化
保川の尾をふるくく
木こりや沢のひゝめる不二の山 許六
立ぬる国の三輪の板 乙由
雪まゝ分て枯ゝ 板君
雲と勢ひ翁や出まくれ中 庵夏
手形戸の留を結ゝてたらく 雄夏

羇旅

花の笠訪て仰ぐ桜哉 芭蕉
一ツ抜くくれたる頭巾衣の
雲雀なくよやもらふ昨の郷
ほくゝりや馬と氷ふ新法師
夜着ひゝ沢の新田野しる旅寝
きゝし牧笛ゝ手離さぬ
帷子ゝ麦ゝ月日の出ぶ
おくゝ出立の宿の下 文蓋

世を捨て夜も旅くさひしは寒く帰り　素来

長寿は旅愛のこころ

ゆくつも今年かり春やすらぬ　丶　弄七

語らしも健なくさ雪の旅　冬爽

あり起夜と沈氣ひしらく旅ぬ　治徳

元日きしひ人我乃孫うれ　耽使

丑へも彩くつれ立りや旅若者　（亦女）ちぬ

治らくく報きうき寄もかきうう　芳良

夜も花のう秋風ぬやうう八山　治園

我家恋いらくく旅の寄され

旅人や嘆かこの蚊寒り泊　治荷

時雨うう千ひうう家旅きこと　涼蓑

鈴童よ日色のかうう彩我新　丶

益雲を乃ひく所寒れ　卯高

寒沈夜急裾は鈴動く旅ぬ　尤次

大気の寒乃人ぬうる寒郷　許六

らの家よ芋色の寒ぬ我ぬ　丶

涼飛や旅よ寒我嬉かくる　丶

寒の長りあひく

寒の長我扇は吸く山路ぬ　支考

秋風の吹とはいとく梅ぼす乳　支考
初ちるやたをよりふる枕ぶし　〃
ゐる声の戸たたくなこの音うれ　玄梅
寒さ風ぶく機を問も寒ぶし　越人
寒たしー梅の実ぶる衣の元　一有
夜の中に木の葉ぶ史や鶯の音ぬ　前口
舟あそきやく氷る夏覚ぶ郭　枚風
ちさ海や蚊ぶさ刺さぬ梅の花　宜朱
夕ちよりの大気ぶ一ちぶり　傘下
風の吹のそ〳〵きぶ海ぶちぶ　仙枝

梅ぶ鳥や夜明の鳥のいさ〻如　孤屋
変へぶるよ食ぶく君をのやな　冬松
山中に入ぶ〳〵
寒ぶもさやぶ幾日を蛩風　惟然
南部より手をあえて
青梁のぶ思所ぶく花ぶ春雲　〃
木もぶ月ぶ君を雲の静さを　〃
大気ぶ通り通ぶ秋の松　和及
伏見の夜毎ぶく
ぼのぶに乗ぶ新和ぶ　路通

あてなく海をこぎ出でて鮫の尾
燈籠や蛍なき世を不あらじ　諫風
旅人や泊り合せて不破の月　万子
夕を伸て長堤を養ふ馬哉　木因
今宵の月風もさしふく衣うち　子郷
鶴子の宿りて　乙由
夕顔の蛍影ひかりかすかに汁　紫遊
皮付茶椀あらくふく夜寒庵　千梅
かりまくや寒灯消て秋さへ於さへ　桐雨

名所

元朝の月ゆるゆる出て其日不二孤山　宗瀘
見ゆ〳〵とたかう花のすゑ丸山　貞室
地をうつ八木の乃孔忘茶林　季吟
富士の山沙弥ゆ乳ま姿うれ　湖春
三笠殿ゆ忘れつゝ出て山もかな　友静
富士よりふく三月七日八ヶ嶽　信徳
幸崎の雲ゆ花ゆう捲すて　芭蕉
象潟の西や西施ゆ新ゆ忘

かるかりの角ゆりのこけた須磨の石　芭蕉

こそこそ雨ぬけてさやさやこぼす川　〃

杉の寿の古法花堂　〃

四一枚植こそさきぬ寿の丸　〃

五月雨にかくれぬ相や勢多の橋　〃

芳野にて

花さくら山々日々うつの鳥の鳴初夢　〃

伊賀の国花垣の庄その名をかくす大事長谷

八幡の料を請ぬるとて伝へ侍りしを

一里ゆくうぬ花寺世尼子孫うや　〃

六月や峰こす雲おのゝ山　〃

湯殿にて月さゝへ入る浮世也　〃

羽黒の事ゆへ右の方嶮しく　〃

同じかの歌ゆへ　〃

象の鼻や奈良の古き御建　〃

桟や命ぬ越のゝ蔦かつら　〃

畢嶮の国を見るやうや浮雲　〃

ゆるさぬくるの田面や雲の西　〃

隅田川みゝ

馬帽子ゆへ松の影ゝ　如竹

須磨の浦にて伊勢物語を思ひ出て　千蔭

月のうつくしき夜の海を二艘の大井川　〃

藤袴長く書てうすき和歌山　嵐雪

飛く宮てて

嵯峨中の御堂さくら散ける　〃

大原や雲の出くるふ春の月　支考

北嶺出る義や明るもちまち義の郭　〃

ちらしの山又ちるこのうしろ　太素

記伝のさくら散て仕来の咲れと為て

奉加一道の御理我さく発れ八千歳料是

つくつくと新発のはつ出つ男仕ら

俳ちちちちと新発や迴廊よ夜の明ぬ　〃　涼菟

言語や迴廊よ夜の明ぬ　〃

力なき八つ新日や須磨の秋　〃

越後おく

人〳〵て新古仕ら冷しや　〃

河傳ふ仕て

あつ〳〵の溝〳〵の溝〳〵の浪　〃

水芭蕉路おく

山次ぎ忍も新田植ゑ　許六

八橋や　四ところ有て　峠茶屋　許六

宇津の山のくゝ

十ばかりなる小娘よりうぶ扇の風　〃

西川の菜かくいゝ　〃　休田の大文字

裝束つくろひきる事　世ひ出す

うの花我かきに関のうれ岩　曾良

素堂や　鶯に分とうれ中　〃

大ゝこやゝらの裏の花菖蒲　〃

和尚の庵

蛍ゝ川　鶯きゝ　片男波　弥書

商人のゆゝ　家ゝ　高飛山　尺子

麦ゝ川や　内ふゝ　ゆゝ　志賀の里　重之

笠津

嶋田ゝ　ひゝ　乳母ゝ　乳母ゝ　こゝ　尚示

道ゝ　ゝ　ゝ　多賀の名井　乳　〃

武義那や　幾ゝ　名乃ゝ　時雨　舟泉

かゝ　ゝ　ゝ　合せゝ　神ゝ　隨友

湖水　遠ゝ　ゝ　比良　琵琶　支考

歌ゝ　ゝ　ゝ　軍　出ゝ　〃

焼篭や　川ゝ　ゝ　山　波　〃

双林寺東の麓にて

名月や拾ひきへしうら東山　支考

夫那衆三度出四方の山の初雪　飛坡

雪積や初しぐれあり紀の字治の雲　石木

出家の嶽の禁を通る

引ぬいや山をまつりて那らの雪　万子

左原寺にて

青苔を我肩さ見る水うつり　〃

西水の宝にて

出家を咲うく雄を乃書加　完爽

枯芦や殺生人の去さうな夜　〃

さ迯宮よりくる特山の号我の宮　〃

安養の園にて

雪の義戸の滝井とうもてる　晩山

乃ぶ書うる人が涌やすらの秋　言水

橋立や赤ちまる書の一文字　春川

きれ〳〵に結子が咎て銭通　木因

すぢの人のく為ぬ婦のうれ　調和

當麻にて

衣の文うれう織女死所

その

木がらしに吹ちらす山の紅葉山　北枝
逢坂や花の梢を東うら　知月
似合しは芥子の一帝や須磨の里　杜國
八重咲の書まて尽くる詩四ぶ　〃
不破の関うりく
月利て月うへ花とる月ぶ　如行
六条河原院の荒ぬ
姫竈に行ひつれる芥子ぶ　意水
道成寺にて
すつの涙つる家出ぶる花の郷　芝柄

山ぶ先く高りへく
雲の峯今のぶ比叡の山　讃岐
孫うりや嶋崎ぶ浮世あぶ社　雲竅
白きくのもて八幡の鳥ぶ　其護
手かりに空へと掛ぶの清水ぶ　乙由
高野山宿寺
我国ぶ素と尽くく涼さ　〃
志ぬ火や流の絵ぶ雪とて　唐元
夏手まの志ぶる妹ぶ涼ぶ　兎士
那谷寺にて

今入さ石ゝ[illegible]り秋の雲　希因
さ[illegible]立や[illegible]一和書[illegible]　雲程
[illegible]りく
[illegible]ゝ[illegible]か夜舟の篝月　麻父
出羽大沼の浮盆ふく
野[illegible]へ引[illegible]ゝ咲てしぶ　塘雨

哀傷

人の牙[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]時と[illegible]ゝ[illegible]　貞室
人[illegible]子の[illegible]　李吟
さて[illegible]　方山
[illegible]
[illegible]人の小袖[illegible]今や[illegible]　芭蕉
[illegible]たゝん[illegible]

塚も動け我が泣く秋の風　芭蕉

蜻蛉やとりもちがらみ大根畑　〃

毫釐さらぬ焼野の煙かな　〃

尼寿貞の方にうりて同じく

数珠かけ見れば玉さらさら　〃

出羽の長谷の観音の鐘　支梁

蟬鳴くや稲毒やけて穂の水　〃

蟬の鳴きかうるに

その上を飛ぶく消ぶ蛍かな　玄来

中秋の夜猶子を送葬し侍りて

加茂の夜月を見るにも捨て送り　〃

孝子下る書りに書かるる冷ゆく北枕　〃

寒ぶ北枕

子に教へ侍りて

仏の頭のあらを出で見れば一鍾　落梧

哲子やひらめ食ふ秋の風　尚白

姫茂の子の長きまこと

秋の詩　古之蒙塵を落涙の歌

義経義仲奉に業を教時

分切のうを笠よりかくまや拙尾法　其角

旅うりう方まうらまろ人戒

俠雲のとくかめうまろ清ようう　嵐蹄

おきまに戒いくを

少しきれ麻木の無も坪れ　惟然

義仲ちの塚とりひき面つおうく

供下にのく賊ちん雪佛　光雲

乗子戒らし方ひく

妻の美氣の遠ぬうう先へ　素山

曲翠の見戒ふくみく

吹郭ちたくく蛍のさうぶ　文孝

元妻法ひう対まうりた

妻の中戒投出しう蛍うれ　、

妻うり投しふくどうくく

ふい新ちくうく妻よ続ぶ　木因

七月十三うり法せしりく人う

生ょ死ぬ仏の中衣御うれ　翁月

人の子うしあひりた

あくふ小ふ尺切製う鮒　荷号

[illegible]

いさらゐや我が[illegible]月の欠　枝風

孫[illegible]

[illegible]　猿雑

[illegible]

[illegible]の死を悲しむ

[illegible]の秋さへ[illegible]

[illegible]の方まで[illegible]

[illegible]　気黄

[illegible]の秋より[illegible]

芭蕉翁の[illegible]七日[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]　文考

出羽の国[illegible]郡[illegible]に

死[illegible]その二月[illegible]の時

病中[illegible]死せし[illegible]

[illegible]　飛城

[illegible]の[illegible]や一七日　藤英

[illegible]

[illegible]　乙由

[illegible]

秋出[illegible]　文素

懐舊

高野山にて　芭蕉

父母のかをしらに恋し雉子の声

大田の社あるく実盛の兜見るく

むさんやな兜の下のきりぐす　〃

墨染や　高野あるく

裏屋や　兵しらもう爰に住　〃

故郷を辞して二年の恋ひうて

あるくの中折り出を振り　〃

古戸や脇の孤屋あるくかすめる　〃

暮秋の夜のあるく小督のつるねの信に住て

きりぎりすや仏の子とあるく人形哭　〃

朝長の墓にて

ちるや君夫人達を散さ九ろ　仁翁

七月六日大坂の討死者を遠忌

吊ひうく

大坂や乃人の世の哀れ七十年　移吟

赤間宮年あるく平家滅亡とあるとみるく

せ海氣ろ〳〵あるく御乃ち平家　源蕉

西行上人之百年忌

遠翁やその昔日と表裏かな　胡及

亡友芭蕉居士追悼　山家集書

飛鳥井雅志ここそ小考拙は追悼す

此集を読誦せ

老さらぬ財布ゆたかの山家集　素堂

芭蕉翁高尾すりて

歎くく歌そ多と歌仙の家　〃

大坂討死之十四忌より

前ゝも忌二度せんと表詠　許六

芭蕉翁三回忌

月雪よ情ゝうるはし歌ゆゑに　〃

海川芭蕉尾越文弱くゝ月雪

豆腐屋も去りの歌や稔の書　〃

義戸の浦孫男の塚ふくく

せて若くく何も又海苔田植時　支考

加賀の今日青人先の御の歌

庭掃くゝ雲やちに去歌の書くいへ弓

その上都表跡も中しくくく

青柳表コ集和秋ゝまれ書ゝ　〃

菓さそ秋の氏垂る海まさは　明水

芭蕉庵跡訪ふ小端波ひゝ跡やえん　曲翠

すゝ風や小端波ひゝ跡やえん

我伊賀の廃よりふて

笠捨てく塚と先く鶏や夕時雨　北枝

栄枯易地

大気の字我桃青細れ　二考

高麗てして

あの花よ京方尺ゆ公繋ゞ　賞良

市垂野ふく

蛍ゆや小川の背の尺ゆさ　約雪

河内記公寺ふく或房花ゆり

ゆくえのさうれ我尺ふく

摘花造ぬうれ　牡丹れ　其角

お摘花大磯より西り五人所有に

ようく略生涯いへ新茅屋を

ゆくれをゆるゆ時

略生く方ゆ抱と何ふと名　三子乱

古戦場ふく

さくかにの孤て義ゝ新一業ゞ　乙州

多武峯の塔賀上人を墓ふらく

此塚を探り苔の苔も紅　希因

[illegible]

[illegible]　乙兒

無邪[illegible]

[illegible]　蝶愛

述懐

うき嵐の山の端うれ身のちりぬ出　湖春

大かた[illegible]月いとめてし七十二　任口

人を見ぬ書や読ん[illegible]　芭蕉

ゆきかくるうくや雲の枯尾花　〃

此秋を何とゝ[illegible]雲り[illegible]　〃

[illegible]代のくゝ小田のひ戻り　〃

[illegible]や嶋よ養あてし[illegible]の砂　〃

[illegible]て爰も枯野さりけりくる　〃

多歴しく友りの句

冬瓜や手にの八郎新の家　芭蕉

古足袋の四十三足を踏こゝる　嵐雪

ふもとあけく市の作りもこゝろ

衣服をらかぶるあるあるなり　〃

かくてうかるもこゝろや干菊　鷺水

病中

切燈の灯も乃人を寄るを寄ろ　〃

義立る力やなくて寒こゝけ　新蕉

ゝ記事の追へまゝく特表鈴　暁山

新歌の稚ゝ歌人老心の郷　和及

芭蕉翁の塚よまふて百年を哭ふ

切実や塚ゝ水ゝ百年の花　丈子

雪ゝ月ゝ月の上我涙かゝ老ゝ　〃

家我焚ゝ

焼ゝ書ゝ栗ゝ花ゝ散ゝ　北枝

鶏時や弓矢を捨ゝ十三夕　太未

ゝ武ゝ士ゝと指やゝ人ゝ玉あれ　〃

義ゝ奏ゝ さゝ八ゝ 月ゝ乃ゝ 月ゝ　正秀

ゝ

手ならぬ秋ぞ哀なるかなくて折らく惜　翁月

我が分かなく病の重かれば袋はつかんも

ちりうせと振れうへく

笄も振るもあるしやちら接　羽紅

秋の田やさかり過ぎて稈二俵　尚白

変ぬ身よ蛛風吹て新二人　瓦黄

手に流を捨て出るる附　路通

消る附る氷を踏くはるく　妙安

我の色とく廓戎出る風巾　たかを

芳飛さそ廓あらぬ菓捨さへ　奥砂

杜美の月乃人生を沢かく　繻子

今年世戎たるを知り北の冬の梶　旦藁

厚姫寺海夏の酒債と訪ひける　千那

枝安ありかをらく

身戎背へ八ふかもる蚊屋の蚤ぶ　言水

己斗の果の乃に稜戎打り懶し

変くるよ打こそるや花蓋　許六

初雪ゆ寄り恨ふく雪の恋乃　雲鼓

四十形法の歌尤変ると乃　朱拭

打ふ寄り三十まてこ夜寒の秋　八橋

さかしらに見てや起彁のつれ無さよ　野坡
痰膈といふ病ひ思ひにもまかりし
酒壺に三四年ありあらはれて
我果を見るまでや仏あと　、

病後

死出たけ兎にいかゝ踊る乙月みれ　牧風
焼香病にあしらし更像ある螺の
男ぶりへはきてしまかれ

地はもとも霜に終へて凍る　支考
病中盆会我にはいかなるさく

慈悲ありてぬかしなどに我のこく　、
淋しくも起てし日は待つるらん　、
鎌倉建長寺にて
落葉うく角をつねにおもひやれ　越人
ちりしや鐘の冬暮をかくしける　、
古里のけふのひと雫暁あり
あらむやの沙弥やわびん清の声　嵐蘭
三井寺の訳高人舟月をいはひしにある
人の親子となる是に覚はれて
兄弟といはで親子の花や秋　乙州

[illegible]　除風

こうくやふ事伝りる比

[illegible]よ世ゝ竟を紫や高の蔓　白空

川米さゝ光[illegible]ひあり[illegible]

[illegible]てゝ

[illegible]月見の友や有[illegible]　[illegible]

病中

[illegible]人の[illegible]ゝ[illegible]ゝ面の[illegible]　可風

贈答

信章記[illegible]ゝ[illegible]

いや[illegible]ゝ富士を[illegible]ゝ[illegible]　李吟

杜國[illegible]

鷹[illegible]　芭蕉

義仲の[illegible]

長等川の水[illegible]

[illegible]

[illegible]

芙蓉殿ゟ李由ゟ洛へ消息のそしに

昼顔や昼寝せうとの家ゝ　芭蕉

その女うあめく

暖簾ゝ裏ゝ山吹桜　〃

手ゝ戸を志んや種蒔る君ゝ　〃

露治ゝ

西行庵ゝあんん花ゝ庵　〃

冷ゝさ哀ゝ指ゝ月ゝ伝ゝ　〃

秋の夜をゝ寝ゝ羽ゝ鳴ゝ　〃

やゝゝ寒ゝ藜の杖ゝ朱ゝ日ゝ　〃

若ゝ麦ゝ寒ゝ風ゝ吹ゝ山ゝ　〃

海ゝ苔ゝ芳ゝ舎ゝ山ゝ　〃

ゝ竹ゝ松ゝ笠ゝ月ゝ夜　去来

芭蕉ゝ葉ゝ　〃

ゝ夜ゝ明ゝ　斜嶺

交ゝ　〃　文字

芭蕉七ゝ　〃

秋無ゝ　〃

ゝ　〃

郭公や菜畑の後ゝ　〃

うへし

飯菓や人参つんて蒸乃か　去来

従見方の発句なりけりた

越し昔へ一畑の風あそひ　、

去来り尓支考にあひて落柿舎の

中あかしたてまつられけり

身すから数り同じく嵯峨の　柿　、

返し

柿ぬしの梢はちかく嵐山　支考

馬の口取る男の跡にも粟稈とて

月かけ傍らや尋ねられても

跡あかし雲の粟田や比叡の秋　、

神風鈴半成て厨り鴨あり杯子出汚り

置はされされはくり手の衆　木因

幻住庵哉讃ひて

木啄の柱をつつく住居かれ　曲翠

芭蕉の庵哉羽ねて

我すり喰を椎の木もあり夏木立　兎黄

もし見て翁哉やかしける夜

奥空のそ旅人て此旅の夢也や　如行

如り信りる信者よりやまさる

焼火まぬ禾少稚蕨くさを吹ひ　千川

蕨をもうえ先くなまきの時

裏屋をかくく冬木の捨うゑ　春川

京おるくへりやまをしけふ

一夜まて三斗寄うえ神くれ　尚広

さを我岩を蕨をりきのくく

冷風も出まくく落れこうしぶ　游刀

将軍の田之の子を屋り入りた絞ふ

りぬふ先ぬひつく時ふれ　壮年

伊勢の孫蕨をり手屋を弱られく

蕨芽の友をやけちうくさ　金孤

将軍兵枕のうるをと嬉しうたへ

帰りうて寄の屋を試しる狩来きま

山村枕亭の枕いる木の節を遠人を

木枕の姫や伊吹りぬうを　文子

うへしく

蕨に又まて来をや初うえ祝　怪蕨

手弱くく娘りあ時

安祝りたく何をふさうれぶ　丶

曲翠の孤館を訪ふ湖水を前に出り

連やあるを表出たるもの　主角

小枝茂手を辱りかくれて

かへ袖を四月尺もとる蕊黛　句堂

うへしし

夜茶けくるを紀州八重火燒　北枝

情多り太閤の茶戎請もてり

気あらてのゆりまひ

千年を経くやあもし社表の結んか　飛坡

訪源者不遇

吟味を抽味噌の答ふ　程己

相ちりる女寺の立住へ山おりたれ送る

萩萩る森ふる市を女郎花　徒吾

治出花出林檎合り桃李も戎

載の梓仙りのれ

暖簾者林檎ふ第を戎　乙由

凉菱ふつ不居を敷く

子の白り二人を先八ち浦　色士

画讃

三聖人讃

月花のたのしみやうたてのあそび達　芭蕉

風雪ニ画くに讃をもとめ

鉢叩きの下ものあさへ気あり　〃

正成像讃鐵肝石心此人之情

杖ヲ引かつ羽や楠大夫家　〃

小町画讃

きさやうあるの日とも裏と笠　〃

盤面ふしろ動ぶる像り

蕊りりく動ふうん人のぶろつま　〃

布袋の讃

物思ひや紙帯の月と花　〃

部屋ひ動ける像り

ちゃ〜動けるも侍ふ秋の風　〃

扇ぶん絵り

ちく風やをやを市ぶまぬく女房　毛角

源氏の画ヨ

傘持ち月ヨ知くるすぶ　〃

寒山の讃

慶ぶべきはいちく堂の乞食ぶり　文角

芭蕉翁の像の讃　二句

月花の外は用なしの翁哉　飛坡

もしかの川辺に冬籠せんとなら人

はけしく降るとも我は出じ　〃

冬籠せんとすれば角やすらん　〃

猩子の讃

さてさて子どもは拙者やらん瓜一つ　文考

大江山の讃

せくさ記孤書を形り山さ九ゝ　光雲

小町の讃

我為ゝ見も鼻も分ま花の色　〃

拙女の孫ゝ

この月と拙ふく居るを墨ぬゝ　光貴

吉野小策ゝ姿孫ゝ

懐ゝ歌ゝ分衣裏ゝ　立吟

亡海の画像をもつゝ写し飛坡ゝ

送ゝ仙川の庵の什物ゝ書付を

鬢の髪世言の時孤をゝ　許六

葉平東下りの詠より

什平の[illegible]やさ詠歌　木因

八盃を出る扇風の画より

奥見るく部のく多く月見人毎　秋水

扇面の梅を写る扇より

梅の下[illegible]くく[illegible]敷　北枝

鶏貴の讃

さく八く乳扇の骨や秋の風　乙由

許六くく弁の詠より

什麦の骨くくふ[illegible]と言くふ風　免士

芝非洛賛

松の梅裏表　社寺岡屯くく　駿河　白隠

富士の讃

六月や日本よ忘れ山の雪　巴静

三保の松原の詠

涼しさや[illegible]すと詠りて三保の崎　巴笑

詩哥

弥陀山光法系の白よ西行上人の哥にうて

何の木の花とも知ぬ匂ひかな　芭蕉

七夕の夜風雨さはがしく小町哥

哥共題にして

亭水丁早も旅寓和尚の上　〃

花蝶ら也男の公共いと東山京菓の題

からふ

一露も古屋さぬ菓方名水兼　〃

花下忘帰因美景の公共

来入分は拘引者をそ忘れ下　飛水

夜来風雨後秋氣颯然新の句を

秋の雨ちんく瓜ふくべ　〃

就中断腸是秋天の句を

雲の旅ちぬて八月妙高空　〃

一鳥不啼山更幽の公共

拘の吉ひとつ大ちく寒山子ぶ　凡兆

馬頭初見采農花の句を

蟋谷の蛙上ちしてけり農花　許六

常春花さきかゝりてそこふ奇のかゝり
そのかゝ緒や何よ結ばし　許六

惜花不拂地の公式

ゆ僕蕊花ゆ朝来ゆ雨　走角

晴香浮動月黄昏のつを

入れの毒よりゆ毒ひくよゝ　風麦

六宮粉黛無顔色の公式

青青の稲つま消ゆや月の露　長虹

宮中拾得蛾眉斧不獻吾君是愛君のこと

花かゝのゝ拉ゝらゝ牡丹ゆ　越人

一ゆ蓮ひも南無何弥陀佛ゝ不人者
蓮のうへゝゆのゝ多乳の公式

荷ゆ蓮ゆ地ゆ敷ゆ也ゆ　李由

月移花影上欄干の公式

月影のひゝ拾ゆ也ゆ接ゆ乳　不卜

次ゆ月と今ゆ山ゆ野ゆ川ゆ
春さゝゆ人ゆ　とゝふゝ

山ゆ井ゆ水ゆ帳の中ゆ　夏火燒　文子

釋教

七歩ゑりて南無阿弥陀仏なれ　守武

殺せ戒

蚤殺すも殺さぬ殺せぬ心　貞徳

本歌寄ふく

弱風ゑりて何そ自力者屋つま　宗因

丈六よりかけろふ亭一石の上　芭蕉

或初歳示て曰ふま禅大底のりひとやゆ

稲妻ゑりまぬ人ゆ者さ　、

寺に春くく諸教寄月見れ　、

明照寺に参りて後の信仏の板を

見るとうて底や深くちらす紫

煙取くくちらす用知度仏うれ　不卜

世常迅速

咲つちりけ信仏法子の細う形　傘下

高野ゑりて

数花よ繁ちちまり裏の流　杜國

妻の数八詩う和歌の堂笔り　雪良

嘲ルも孫陀多文りかりきは　玄梅

尼寺やとく茅の宿ちる径　言水

法隆寺より南無仏の太子を拝む

御稔のとうれんかうあのゆふ　千那

門秘書薩行

夕立て端ぶうへ〜そうそう哉　丶

堂の菓の徐り菓うく敷仁亜ル　松芽

皆是吾子

似我蘇よ句ゆ母彼ゆ　治信

善丸ゥ利髮セ〜時蜜辞セ

鉢姫を出くもうき情子河ゥ夜の月　文子

仲畑や散ちりまりて仏立世　〜狐

薬品如子得母

体ちとく蛋ちとつく大角豆ゥ　胡及

同如病得醫

かちく吋信水乃分敷山路ゥ乳　丶

志如者ふく器光寺必来開帳の時

涼くく飛出ようれゥ亡仏ゥ　奈来

峡礼の時

後拾ゥ卯の忘き部　和俳山　丶

故郷ちとへの中に声ゥ合仏講　来山

一切衆生悉有佛性

盗人去潜行こゝのやうなり　来山

前業所感

猫の爪くゝ因果殺　西吟

薬草喩品

百まやひくりまゝ荷ふ畚の中　地徒

無慙愧

但繋縛泣うゑくゝ傍つた　落梧

深着世界無慚心

つゝ光くゝ執くゝ火焼ぐ　嵐雪

煩悩あり衆生あり

骸骨のゝ上ゝ茶ゝ花ゝ乳　皇夷

焼ゝ火ゝ灰ゝもきせて云ふ　〃

涅槃道

地獄ゝ切ゝ切ゝ西ゝ水　西里

人道

立ゝ執ゝ我ゝ我ゝ生ゝ死ゝ　〃

一夏山流ゝ籠ゝ

年に為ゝ合点ゝ外ゝ素ゝ古ゝ

食ゝ寺ゝ行ゝ帝ゝ夕ゝ乳　支考

〃

飲酒戒

世の業のうらみやとゝやまのくれ　し

殺生戒

いのちとのゝ虫ぞ命成凡ぬり　丶

法花八講の侍りに女房の祇園所と

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

龍女成佛の和りいとりてきのひわへを

魚うむ音のしるして

ほろ〳〵と為る涙や袖をぬ　越人

三衣無安猶如火宅

六月の行ぬるひ為るゝ　丶

草木國土悉皆成佛

竜王家や接拂るゝに佛色　秋坡

隨縁真如

時雨ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵て為る空の色　丹野

法會說の心みゝ

貧乏神の子ゝ稲妻のきゝ鼓の時ゝ　木芦

鉢の子ゝ木務とゝゝゝ法ぬぶ　卜枝

法施光明ゝゝふを

小服脇よひゝゝ茂やゝを玉接　角上

地獄

せきもりまてゐもくまやゐ　それ

法然聖人

ゆゑあつくうんれよ　熟れ

罷科のきらくさやき　春西

帰西弟子御佛

憂法の聖人ほんの御うれ　恩愛

第ゆゑうれ仏の道より　蓮之

奴アちうり

尼達の髪よ　拾ゆうひれ　希内

富士道

鶴屋ちんて　乙由

六月の末　高雄山　ちきた

鈴鹿つ長　ゆ　盛の道まど　盤吹

三界唯一心

富士ちゆ　憂一　千代

不楽　浮提濁悪世

代望　居　麦　蝶　蝶夏

神祇

伝あり世見ども絶ぬきくぶ　貞徳

伊勢ふく〜頃賀と人君道公と引て

たまひ〜事成ぬへ出さく

解ふ清〜ぬきくふの風乳　芭蕉

二尺の圖戎和ミ作りく

うくうふ乳徴の花も浦君春　〃

熨田の社由緒度有り氏

磨玉氏猿と信〜雪と君忘　〃

高坪山の禁を通りく

狩尺〜忘よ吹り神の歌　朗水

知音や言ふ〜神を出やに　言水

子乙女の尺公引く立の鏡乳　荷弓

ちん〜〜梅ちう歌色火ぶ

乙の岩戸たりて

用出さいく秋の色ふ猿乳　方山

宮も水ふ人てまを神の梅　龜洞

伊勢法楽

玉海岩を知光の巻乳一ツぶ　許六

住吉法楽

月花すぐれ山すきすぐるの鏡うれ　許六
山面に面をそめし紅葉毎　風国
青々青や住吉の松の岸の切　文蛙

みそぎうらの社すぎ面を形ちうつく
夕立や四方見めぐらす神垣を　青角

摂津の坂本社を神垣面を左ちうて
神風の面うそ白へ夏青草　除風
元日を法泉寺ぬ神代ぶり　濱石
炬きけ庚申の夜を寒ぬ初そ　孫蕉

庚申やこうこに火焼の宵迄炭　残月
炉の子やまれ地蔵の二はしら　春川
冬ごもりや神垣の松うら池つ　義梧
備ぶら神そうこ松の春　之免
神枕やきれけり月ぬ梅の色　我黒
つれづれ迄ぶく物憂迄ぶ燕うれ　如泉
夕立や蓮ぶ傍ぶく神垣　乙由

備中吉備津宮

稜の宮ぶ中ふや中巻の出ひ士　意元

祝

愛敬祝ふて

後り今数せんとすれども一つの松　李兮

知らぬの新麦ふて

とたのもや若ちろこふ春戸の梁　芭蕉

ちまちまかくし居らるへうり

先祝へ麦をちろ居冬蓋り　〃

乙物我老りて

人と成と笑をて我急ぎ云　〃

素堂の母七十の日七月七日

ふふ十よまさる方素堂七移を歌ふ

七株の萩のもとや星の秋　〃

星搗の刺髪へ賢門を賀ま

初年に桐の刺し　駄の那　〃

武士のみ世長栄祝ふて

笋の時ちちちちし　三の中　去来

手を花とく赤機ふ毛ちちへを賀して

千代の秋白ひよちちし　米　〃

於へ学問ありとて儒士の子より
本所第六の相の老若より
駒掛飯やしく人我孫あるく　許六
時をしらし犯る歌るよ萩まよ　酒堂
武家の家督未後有る孫後より
浅草の接種の吉凶を考ひ　万子
姉と弟と二人りみくる人より
月夜くらう雛のあへく機と　路通
百姓の子を二男三男をれしより
仕方くしるる事に

蕉葉荷梁敷くへの京形ル　芳足
荷写う四十の表う
我妻を仏そのまに人ものるれ　重五
紙お大村の何うう商家の娘男我孫く
松つ形くうの亭しまり餘　飛坡
人の婚礼我いふく
又仏の根よかるひう孫さ次　与考
三月やの弥荷り付生国の花　素林 望勝

安永三年甲午三月

書肆　西村源六
西村市郎右衛門
井筒屋庄兵衛　梓行
橘屋治兵衛

雜四十六

蝶夢子書述目録

芭蕉翁發句集二冊	去來丈艸發句集二冊
同　懷中小本二冊	名所小鏡　三冊
類題發句集五冊	蕉門俳諧語錄二冊
芭蕉翁文集　二冊	松島道中紀　一冊
同　俳諧集　三冊	新類題發句集　五冊

文政年間
諸色名録發句集三冊

辨慶記	一冊
芭蕉翁終焉伝	二巻
袁宏道紀行	一冊
宰肴紀行	一冊
雲鳴道好記	一冊
袁宏道の手紀	一冊
遠江乃紀	一冊

蕉門書林 寺町通二条下ル
橘屋治兵衛版行